

研究報告

高齢者自主サークルメンバーとの世代間交流をととした学生の学び

～ “おばあちゃんが伝えたい手づくりレシピ” づくりをととして～

塚本陽子* 造田亮子 齋藤千秋 武田富美子

名寄市立大学保健福祉学部看護学科

キーワード：世代間交流 レシピ集づくり 学生の学び

1. はじめに

内閣府(2016)の高齢社会白書¹⁾によると、65歳以上の高齢者のいる世帯は全世帯の47.1%を占めている。世帯構成割合を見ると、夫婦のみの世帯が一番多く約3割を占めており、単独世帯と合わせると半数を超える状況である。3世代世帯は減少を続け、高齢者と同居経験を持つ若者も減少している。祖父母などの高齢者や地域の様々な世代と触れ合う機会が少なくなることで、世代の分離を招き様々な弊害を生じているといわれており²⁾さまざまな分野で世代間交流の重要性が指摘されてきた³⁾。

世代間交流とは、「子ども、青年、中年世代、高齢者がお互いに自分たちのもっている知恵や英知、経験や技術などを出し合って、自分自身の人間発達・向上と、自分の周りの人々や社会に役に立つような健全な地域づくりを実践する活動」⁴⁾であり、さまざまな世代がともに活動しお互いを理解していく交流⁵⁾である。また、国際世代間交流協会(ICIP)は、世代間交流プログラムについて「高齢者と青少年の間で互いの能力や知識を意図的・継続的に交換し合う社会的媒体」と定義している。

世代間交流の実践報告は、社会教育分野、看護学、社会学など様々な分野で報告があり、その効果と重要性が明らかとなっている⁶⁾。子どもの側の効果として、高齢者への尊敬の増加、世代継承性の増加、自己効力感の向上、健康への認識の高まり、社会的スキルの向上、他者への信頼の向上、地域共生意識の向上が挙げられているが、高齢者やプログラムに対するネガティブな意見もある⁶⁾。この先行研究による「子ども」には幼児から大学院生まで含まれている。大学生を対象とした研究では高齢者に対して抱いているイメージはどちらかと言えば否定的な意見⁷⁾⁸⁾⁹⁾もあるが、教育後には高齢者イメージが変容することも明らかにされている⁹⁾¹⁰⁾¹¹⁾。また、看護学生を対象とした研究では、疾患や障害を持つ高齢者にかかわる実習だけでは健康な高齢者への理解が不足し¹²⁾、地域高齢者との世代間交流では高齢者に対する肯定的な理解が深まると示唆されており¹³⁾¹⁴⁾、教育を通して元気で活動的な高齢者との交流を行うことが、高齢者イメージの変容に効果的であると考えられる。効果的な世代間交流を行うためには、両世代に相互に関連しあう互恵的效果を中心としたプログラム⁶⁾や、高齢者が有益な存在であることが実感されるような接触の持ち方、相互関与を可能とする交流プログラムの創出が重要³⁾であり実証を積み重ねていく必要がある。

看護にかかわらず、人を対象とする専門職を養成する教育機関では、高齢者と関わる機会の少ない学生が、高齢者への関心と理解を深められるような教育実践が求められていると考える。A大学では、連携教育の一環として3年生を対象としたフィールドグループワーク(以下、FGW)を開講している(表1)。FGWでは、栄養・看護・社会福祉の各分野の知識を活用して、地域住民を対象にフィールドあるいは学内で事業または行事を企画・実施し、保健医療福祉の連携に加え地域との連携や協働について3学科混成で学ぶことを目的としている。このFGWは、連携教育のみならず、地域住民と関わる良い機会となっている。

平成28年度のFGWにおいて、Eゼミでは大学生(以下、学生)とB町高齢者自主サークルメンバー(以

*責任著者 E-mail:community@nayoro.ac.jp

下、メンバー）が協働し、『おばあちゃんが伝えたい手づくりレシピ2』（A5版48ページ）を作成するという世代間交流活動を実施した。本研究では、レシピ集づくりの過程をととした大学生の世代間交流の学びについて明らかにすることを目的としてここに報告する。

2. レシピ集づくりをととした世代間交流の概要

1) A大学連携科目（平成26年度入学生）

表1 連携科目と開講年次

学 年	科 目 名	単 位
3 年	保健福祉連携論	必修 2 単位 30 時間
	フィールドグループワーク	選択 2 単位 60 時間

2) 世代間交流活動の概要

A大学教員からサークルへレシピ集づくりの提案を行い、メンバーの了解を得た。学生には、FGW のプレゼンテーションでサークルの紹介とレシピ集づくりを説明し協力学生を募り、A大学の学生とメンバーとで『おばあちゃんが伝えたい手づくりレシピ 2』に取り組んだ。レシピ集作成の目的は、メンバーと学生の協働でレシピ集を作成し、高齢者の知恵やわざを地域へ伝えることとした。

表2 世代間交流活動のプログラム

時期	学生のプログラム
4 月	オリエンテーションとゼミ発表
	B町高齢者サークルについて紹介
	今後の活動計画・学生の自己紹介作成
5 月	レシピ構成の検討
6 月	レシピ集編集のための研修
	第1回 レシピ集作成のための調理（山菜料理）
7 月	調理後の編集作業
	第2回調理に向けての打ち合わせ
7 月末	第2回 レシピ集作成のための調理（メンバーの得意料理・伝えたい料理）
8～11 月	調理後の編集作業（メンバーと電話や手紙でやり取り）
	レシピ集の原稿作成・レシピメニューの試作
12 月	レシピ集の編集・構成の検討
1 月	レシピ集の編集・校正の確認、FGW活動報告会の準備と実施
2 月	レポート提出

3) B町高齢者自主サークルの特徴

A大学から約200Kmの場所に位置しており、人口は約5,000人、高齢化率36.0%（全国平均26.6%）である。平成18年にB町の高齢者生涯学習事業に参加していた女性7名でサークルを結成した。町や地域の要望に応じて、若いお母さんたちや子どもたちに料理を教えたり、イベントで手づくりおやつを提供したりと、料理や生活の知恵を伝える活動を行っている。平成22年には地元の大学生と協働して「おばあちゃんが伝えたい手づくりレシピ」を作成した。平成28年度の活動時の平均年齢は80.4歳であり、現在約10名の高齢者が活動している。

3. 研究方法

1) 研究目的

レシピ集づくりの過程をととした大学生の世代間交流の学びを明らかにすることである。

用語の定義

世代間交流：子ども、青年、中年世代、高齢者がお互いに自分たちのもっている知恵や英知、経験や技術などを出し合って、自分自身の人間発達・向上と、自分の周りの人々や社会に役に立つような健全な地域づくりを実践する活動⁴⁾

学び：レシピ集づくりにおける世代間交流を通して得たことや気づき、感じたこと

2) 研究デザイン

質的記述的研究：本研究では、レシピ集づくりの過程をととした学生の「学び」を見出すために、学生の経験や気づきを確認しながら、語りの中の言葉を用いて記述することを目的として質的記述的研究デザインを選択した。

3) 研究協力者

平成 28 年度の FGW を履修し、レシピ集づくりの活動に参加した学生 5 名に対して、研究の主旨について説明し、日程を調整してインタビューを実施した。

4) データ収集方法

グループインタビュー：他の研究協力者の発言により、自己の思考をまとめ想起する効果を期待してグループインタビュー法を選択した。グループインタビューの長所は短時間で多くの人々の見解を得られる事にある。また、他の人が言ったことに反応するという利点があるため、さらに豊かに、さらに深く意見が表出される可能性がある¹⁵⁾とされている。本研究では、研究協力者に対して半構造的インタビューガイドに基づきグループインタビューを実施した。インタビュー内容は、①レシピ集づくりの体験を通して得たことや気づき、感じたことと、②世代間交流を行ったことで良かったと思うこと、③世代間交流を行う上で困ったことや配慮してほしかったこと等であり、交流の開始からレシピ集作成までの流れに沿って尋ねた。データ収集は、レシピ完成から2か月後の平成 29 年 5 月、大学内のプライバシーを保つことができる静かな部屋で実施した。インタビューは1回で約 120 分だった。

5) 分析方法

グループインタビューの内容は逐語録とした。逐語録から、レシピ集づくりを通して得たことや気づき、感じたこと等、学生の学びに関連する文脈に注目し、意味内容を損なわないようにコードを抽出した。意味内容の類似するコードを集約しサブカテゴリーとした。さらに類似するサブカテゴリーを分類してカテゴリーを生成した。

6) 研究の真実性の確保

分析の真実性を高めるために、録音データは収集後直ちに逐語録に起こした。逐語録からカテゴリーが導き出される段階まで何回も逐語録に戻り、複数の研究者で検討しながら分析を行った。真実性の確保のため、結果を記述する際には、協力者の語りを含め詳細な記述を心掛けた。

7) 倫理的配慮

研究協力者には、研究の目的、方法などについて口頭と文書にて説明し参加の同意を確認したうえで実施した。協力依頼は、FGW を受講した学生の成績が公表された後に行い、インタビューはすべての成績評価が終了した後に実施した。実施に際し改めて、口頭と文書にて、研究協力の自由意志、匿名性の確保、成績等への影響はないこと等について説明し同意書を得て実施した。本研究は、名寄市立大学倫理委員会の承認を得て実施した。

4. 結果

1) 研究協力者の特性

インタビュー対象は、平成28年度にFGWを選択しレシピ集づくりに参加した学生5名である。平均年齢は21.4歳(±0.2歳)で、男性1名、女性4名であった。所属している学科は、看護学科3名、社会福祉学科と栄養学科が各1名であった。祖父母との同居経験がありと回答した学生は3名(60%)で、同居経験なしと回答した学生は2名(40%)であった。すべての学生が、過去1年以内に高齢者と交流した経験(実習を含む)を有していた。

2) レシピ集づくりをとおした世代間交流からの学生の学び

表3 レシピ集づくりをとおした世代間交流からの学生の学び

カテゴリー	サブカテゴリー
おばあちゃんの配慮への感謝	家族のような温かい受け入れ
	おばあちゃんとの触れ合いの楽しさ
	おばあちゃんの積極的な関わり
	おばあちゃんの関わりへのありがたさ
おばあちゃんとの関係を深めたいという思い	落ち込んでいるおばあちゃんへの関わり方にとまどい
	おばあちゃんともっと関わりたいという気持ち
	交流回数が増えることで理解が深まる
関わり方の多様性	ありのままの自分をだせない
	他の学生の関わりからの気づき
	人との関わり方は時と場合
高齢者が活躍できる場の存在	年齢を感じさせないおばあちゃん達のパワフルさ
	おばあちゃんと学生の元気のやりとり
	高齢者に対する見方の広がり
	いろいろな人と交流できる地域の良さ
おばあちゃんの知恵やわざを伝える工夫と難しさ	協力して一つのものを作り上げる
	おばあちゃんの知恵やわざを伝える工夫
	伝えたいからこそその難しさ
伝統を継承していく事の大切さ	高齢者と関わることによる伝承の継承
	おばあちゃんのと活動のレシピとして残す

研究協力者へのインタビューから19のサブカテゴリーと6つのカテゴリーが抽出された。導き出されたカテゴリーは、【おばあちゃんの配慮への感謝】【おばあちゃんとの関係を深めたいという思い】【関わり方の多様性】【高齢者が活躍できる場の存在】【おばあちゃんの知恵やわざを伝える工夫と難しさ】【伝統を継承していく事の大切さ】であった(表3)。

以下、学生の学びについて抽出された結果について、カテゴリーを【 】、サブカテゴリーを《 》、説明のためのコードを〈 〉、研究協力者の語りは「 」で示して述べる。記述では、交流を行ったB町のメンバー固有の内容については研究協力者が語った「おばあちゃん」と表記し、一般化されたものは「高齢者」と表記した。結果の説明全体を通しては「メンバー」と表記する。研究協力者の語りは口述どおりに記述し、意味が分かりにくいところは()の中に言葉を補った。

【おばあちゃんの配慮への感謝】

このカテゴリーは、学生とメンバーとの交流の開始から、レシピ内容の確認のやり取りなど様々な場面で、メンバーから温かい配慮を受けていたことに対する気づきを表しており《家族のような温かい受け入れ》《おばあちゃんとの触れ合いの楽しさ》《おばあちゃんの積極的な関わり》《おばあちゃんの関わりのありがたさ》という4つのサブカテゴリーから抽出されている。

学生は、初回から〈笑顔〉や〈ボディタッチ〉で迎えられ、〈自分の孫の様といわれることのうれしさ〉の中で、〈ここに溶け込んでもいいんだ〉という安心感から《家族のような温かい受け入れ》を感じ、《おばあちゃんとの触れ合いの楽しさ》について語った。レシピ集づくりのための調理では、メンバーが豆知識を〈まとめるのに困るくらい〉〈自ら話してくれた〉と《おばあちゃんの積極的な関わり》や、豆知識を伝えるために〈お手紙をわざわざ書いてくれた〉こと、料理以外にも〈会話を通して知ろうとしてくれた〉と《おばあちゃんの関わりの有難さ》を感じていた。学生は、さまざまな場面で【おばあちゃんの配慮への感謝】の気持ちを抱いていた。

「料理してるときも、誰に聞いてもやさしく教えてくれて、わかんなかったら…。なので、そういうところも、聞きやすい雰囲気もだしてくれてたのもあって…」

【おばあちゃんとの関係を深めたいという思い】

このカテゴリーは、2回の調理を経験して、もっとメンバーとの関わり理解を深めたいという思いを表し、《落ち込んでいるおばあちゃんへの関わり方のとまどい》《おばあちゃんともっと関わりたいという気持ち》《交流回数を重ねることで理解が深まる》という3つのカテゴリーから抽出されている。

学生は、調理方法の違いによって、あるメンバーが〈落ち込んでいることに気づいた〉が〈共感するしかできなかった〉と《落ち込んでいるおばあちゃんへの関わり方のとまどい》について語っており、〈一緒に食べる時間に確認〉するために〈交流できる形で座ればよかった〉と、《おばあちゃんともっと関わりたいという気持ち》を持っていた。遠距離であり、2回だけの調理だったが、〈原稿についての意見交換〉など、〈交流回数が増えることで理解が深まる〉と【おばあちゃんとの関係を深めたいという思い】を語っていた。

【関わり方の多様性】

このカテゴリーは、高齢者との関わりを難しいと感じていた学生の発言から意見交換を通して、関わり方の多様性についての気づきとして表されており、《ありのままの自分を出せない》《他の学生の関わりからの気づき》《人との関わり方は時と場合》という3つのサブカテゴリーから導き出された。

普段、高齢者の方との関わりの少なさを感じていた学生は、接し方や話題づくりなど〈関係づくりが難しい〉と思い、《ありのままの自分をだせない》と自身の関わり方を振り返り〈弱み〉をとらえていた。〈他の学生が初対面から親しく接しているように感じ〉《他の学生の関わりからの気づき》を得ていた。一方で《人との関わり方は時と場合》という意見もあり、学生達は【関わり方の多様性】について学び合う機会を得ていた。

「おばあちゃんに対しても敬語、接待敬語。崩れて接しないっていうか、崩した自分で接することができないっていうのが多分弱みですね…(省略)…〇〇(学生名)とかそういうのないなあって、なんかすごい仲良くなれてて。ああ、なんかすごいなっていうのも思うんですけど…(省略)…そういうのも学べる機会になったのかなって思います。」

「逆にそういうのは(ありのままを出すのは)きちんとした場とかそういうところでは、そういうのを出しちゃうと他の人から見たらちょっと偏見の目があっちゃうっていう部分も。悪い部分もあるし、いい部分もあるからそれは使い方だと思うんだけどね…(省略)…時と場所と場合。」

【高齢者が活躍できる場の存在】

このカテゴリーは、メンバーの年齢を感じさせないパワフルさに驚き、双方の元気のやり取りやメンバーが町の方々と交流する姿をみて、B町では高齢者が活躍できる場があることへの気づきを表しており、「年齢を感じさせないおばあちゃん達のパワフルさ」《おばあちゃんと学生の元気のやりとり》《高齢者に対する見方の広がり》《いろいろな人と交流できる地域の良さ》という4つのサブカテゴリーから抽出されている。

学生は、B町のメンバーの料理は〈これぐらい〉という〈適量が多く〉〈すごく大胆〉な中で、〈目分量で作ってちゃんとした美味しい料理ができるのはすごい〉と、〈積み重ねのすごさに感動〉していた。そして、同じレシピでも〈おばあちゃんによって作り方が違う〉ことを知った。調理をする中で、〈高齢なのにパワフルに動いている姿〉や、学生の質問に対する〈回答の豊富さ〉や〈バリエーションの豊かさ〉に、〈自分たちの知らない知識を持っている〉〈自分たちの知らない世界を生きている〉と、おばあちゃんの持っている力に気づき、「年齢を感じさせないおばあちゃん達のパワフルさ」にふれた。メンバーに〈元気を与える〉一方で、〈逆に元気をもらった〉と、《おばあちゃんと学生の元気のやりとり》をする中で、B町での〈高齢者の置かれている環境への関心〉をもち、〈地域の高齢者に興味を抱くようになった〉〈高齢者をいろいろな視点で見るようになった〉と《高齢者に対する見方の広がり》ができたと感じていた。

ある学生は、昔は3世代で暮らし高齢者の面倒を見る人がいたが、今は家族が都会へ行き、高齢者が自分で自分たちの面倒をみることを〈今の環境は高齢者には生きづらい〉ととらえていた。しかし、B町では若いお母さんたちなどに、メンバーが〈自分たちの料理を伝える環境がある〉ことを知り〈世代間交流がある〉〈地域の温かさ〉にふれて、《いろいろな人と交流できる地域の良さ》に気づき、メンバーがパワフルに活動できている背景として【高齢者が活躍できる場の存在】を認識することにつながっていた。

「1言ったら10返ってくるって言ったように、自分が想像してないことをあっちも言ってくれて。それは自分が考えてるその一個のことに対して。自分だったらその一個のことしか考えてないんですけど、相手はその一個のことからさらに派生させていろんなことを考えてくれてるっていうことを感じるようになった」

「じゃあ自分もそれに合わせなきゃいけないなってなって、自分も一個のことから周りの見えてなかったところを見るように…もっと具体的に見るようにするっていうのを…今までこう見てたものが、ちょっと上から見たりとかそういういろんな客観的な目線を、見るような力は少しついたのかなって思います。」

「結構生きづらい、高齢者になってすごい生きづらい環境の中で…(B町では)ああやって料理できるそういう環境がある…(省略)…地域で、みんなで協力したりしてそういうサークルとか作ったり、交流したり。若いお母さんとかもいましたよね。いたのでなんかそういう関わりとかも、そういうところであるんだっていうことを(B町に行って)知れるきっかけにもなった」

【おばあちゃんの知恵やわざを伝える工夫と難しさ】

このカテゴリーは、レシピ集づくりという協働作業を通じて、学生がメンバーの知恵やわざを伝えるため

に工夫したことや、伝えることの難しさを感じた中での気づきを表し《協力して 1 つのものを作り上げる》《おばあちゃんの知恵やわざを伝える工夫》《伝えたいからこそその難しさ》の 3 つのサブカテゴリーから導き出された。

レシピ集づくりの協働作業では、《協力して 1 つのもの(レシピ)を作り上げる》ために、メンバーが料理を伝え学生がレシピを編集するという〈おばあちゃんと役割分担〉をした。1 回目は担当を決めず調理を行ったが、2 回目からは、〈自分の担当料理を意識して豆知識を聞く〉ように、学生の役割分担を行った。調理中は〈おばあちゃんの調理のスピードに複数学生で対応〉し、編集では〈他の学生の担当料理でも自分が聞いた豆知識を伝えた〉。学生は、〈人数よりもチームワーク〉で対応できたと考えていた。

学生は、料理の作り方や豆知識について、〈料理の品数が多く〉〈おばあちゃんの調理のスピードが速い〉ため、〈料理をしながら聞くことは大変だった〉と取材の大変さを語った。そして〈目分量や材料の適量を明確にしようとした〉り、〈作り方の工夫〉について〈なるべく多くのメンバーから話を聞く〉ように考え、聞いたことを〈ひたすらメモ〉して、メンバーの料理を伝えられるように取材した。しかし、メンバーの知恵やわざを聞き取るためには〈メモしたら自分の中で分かりやすくしちゃう〉と感じ、〈直接聞いた言葉の方がわかりやすい〉〈ニュアンスまで正確に聞き取る〉ことが、《おばあちゃんの知恵やわざを伝える工夫》として語られた。メンバーの手業(わざ)を伝えたいが、聞いても〈口頭でうまく説明できない〉と言われ、学生自身も〈手業(わざ)をうまく言葉にできない〉と感じ、〈言葉より一緒にやった方が伝わる〉とわざを言葉にする難しさを感じていた。

調理のときに〈もっと詳しく聞けばよかった〉ことに、〈編集作業をする中で気づき〉〈後から豆知識や作り方を再確認した〉。レシピの〈編集作業に時間がかかった〉が〈勉強になった〉と感じ、表紙のイラスト作成では〈好きなことは苦労にならない〉と、編集の楽しさと大変さについて語った。〈おばあちゃんの豆知識(話)をやわかりやすく表現しようとした〉り〈表現が間違っていないかを確認〉し、絵や文字の配置、写真の画素数など、〈読み手の立場に立って工夫しなければいけないこと〉が勉強になったと感じていた。

学生は、レシピ集づくりを通して、《伝えたいからこそその難しさ》を感じ、わざは〈言葉より一緒に活動した方が伝わる〉と【おばあちゃんの知恵やわざを伝える工夫と難しさ】について語っていた。

「なんかうまく、この手でやることをうまく言葉にできないから、レシピにうまくのせれなくて、どう表したらいいかも分かんなくて。口頭で聞いてもなんか全然ピンとこなくてっていうのが、すごい難しかった」

【伝統を継承していくことの大切さ】

このカテゴリーは、メンバーとのレシピ集づくりを通して、高齢者と関わることで伝統が継承されることや、活動を残すことの大切さを表し、《高齢者と関わることによる伝統の継承》《おばあちゃんとの活動をレシピとして残す》という 2 つのサブカテゴリーから抽出されている。

学生は、レシピ集づくりを通して、〈教えてもらったことを受け継ぐ〉ことや〈共食と調理により伝統を継承できたと実感〉し《高齢者と関わることによる伝統の継承》を体感していた。学生にとってレシピ集は〈私たちがおばあちゃんたちと関わったことを知ってもらうもの〉〈大学の連携教育の活動を知ってもらうもの〉として《おばあちゃんとの活動をレシピとして残すこと》の意義があり、【伝統を継承していくことの大切さ】を考える機会となっていた。

「共食で、伝統の受け継ぐとかそういうメリットとか。メリットがすごい、体っていうか身体的にも精神的にもなんかいいなっていうのちょっとつなげて感じた…(省略)…自分も実感できたので、なんて

言ったらいいかちょっと分からないですけど。考えるいい機会になりました。」

「ああこの大学こういうことやってるんだなとかって。で、なんか今、連携教育とかもあって私たち3学科集まってるから、こういう授業でこういうことしてるんだとか、高齢者の人とこういう関わってるんだっていうのもいろんな人に知ってもらえる」

5. 考察

本研究では、レシピ集づくりの過程をととした大学生の世代間交流の学びを明らかにすることである。研究協力者の特性を踏まえ、①メンバーと関係性を築く、②高齢者が活躍できる場の存在へ気づく、③世代間交流をととした伝承の役割の3つの視点から考察を述べる。

1) 研究協力者の特性

今回、レシピ集づくりに参加した学生は実習を含めて全員が高齢者との交流を経験していた。そのうち、自分の祖父母との同居経験を持つ者は5名中3名(60%)であった。平成28年の国民生活基礎調査¹⁶⁾による三世帯世帯は約5.9%であり、今回は高齢者に対するイメージを持ち、高齢者との世代間交流について意欲的な学生が、レシピ集づくりに参加していたと推測される。FGWは専門基礎分野の選択科目として3学科の学生の合同授業であり、学生の興味関心によってテーマを選択できる科目である。興味には学習のプロセスや成果の質を高める心理機能がある¹⁷⁾と言われており、本研究では、活動内容に対して一定の動機づけがされている学生の学びとして考察する必要がある。

2) メンバーと関係性を築く

学生は初回から、自分の孫のようと言われ、ここに溶け込んでもいいんだという安心感から、家族のような温かい受け入れを感じ、触れ合いを楽しんでいた。メンバーの温かい受け入れは、学生にとって緊張感を和らげるものであり、その後の交流を安心して進められるものとなったと推測される。その関係の中で、レシピ集を作るためにたくさんの豆知識を教えてくれる《おばあちゃんの積極的な関わり》に対して、学生達もいいものを作ろうと積極的に質問することができたと思われる。学生は、メンバーが聞きやすい雰囲気を出してくれていたと気づいており、さまざまな場面で【おばあちゃんの配慮への感謝】への気持ちを抱きながら交流していたと推測される。

遠距離であり、2回だけの調理だったが、学生は〈原稿についての意見交換〉など、《交流回数が増えることで理解が深まる》と【おばあちゃんとの関係を深めたいという思い】を持ち、関係を築くための【関わり方の多様性】について学び合う機会を得ていたと考える。

学生は、メンバーに温かく受け入れられる中で感謝し、メンバーの伝えたいという思いを感じて、一緒にいいレシピ集を作ろうと積極的に関わっていたと思われる。さらに学生の関わりに対してメンバーも積極的に関わり、相互作用により関係性が築かれていったと考える。

自然的な交流、短期的な交流では親密な対人関係は構築されにくい¹⁸⁾と言われているが、今回の交流ではレシピ集づくりという協働プログラムの中で、メンバーと学生が「伝える―聞く」という役割を通して交流を深めることができていたと推測される。遠距離という条件で2回という短期的な交流であったが、事前に自己紹介を作成し、調理後は手紙や電話でやりとりをしながら、レシピの完成という目標に向かってメンバーと学生は関係性を継続していくことができていたと考える。

3) 高齢者が活躍できる場の存在へ気づく

今回の交流を通じて、学生は平均年齢80.4歳という高年齢でありながら、レシピ集づくりを通して、メンバーが豊富な知識と経験を持っており、その〈年齢を感じさせないパワフルさ〉を驚きとともに感じている。

今回参加した学生は、看護・社会福祉・栄養とケアに携わるための専門教育を受けてきた3年生であり、高齢者を支援の対象として学習する機会が多い。しかし、今回は学生の想像以上に知識と経験をもつ高齢者と交流する機会となっていたと推測される。学生の質問に対する〈回答の豊富さ〉や〈バリエーションの豊かさ〉に、〈自分たちの知らない知識を持っている〉〈自分たちの知らない世界を生きている〉と、おばあちゃんの持っている力に気づき、高齢者に対して支援の対象ではなく学ぶ対象として、高齢者像を変容させていたと思われる。世代間交流の成果⁶⁾¹⁰⁾として、高齢者イメージの改善や、高齢者への尊敬が増加することが明らかにされているが、今回の交流においても同様の結果が得られていたと考える。

今回の交流には、子育て中の母親や大学生、車いす利用者などが参加しており、学生はメンバーが〈自分たちの料理を伝える環境がある〉ことを知り〈世代間交流がある〉〈地域の温かさ〉にふれて、《いろいろな人と交流できる地域の良さ》に気づき、メンバーがパワフルに活動できている背景として【高齢者が活躍できる場の存在】に気づくことができていた。

藤原¹⁹⁾は、世代間交流プログラムの成果は、プログラムの良し悪しや参加者特性によって変わるだけでなく、地域に現存するソーシャル・キャピタル^{注1)}によって影響を受けると述べている。学生はB町で世代間交流を実施したことにより、高齢者の元気さやパワフルな活動の背景に、個人の特性だけでなく地域の人々との交流が影響していることを感じ、高齢者が活躍できる地域の良さに目を向けることができていたと思われる。これは、メンバーと学生の交流だけでは学べなかった視点であると考え。看護学生と地域高齢者との世代間交流の成果¹³⁾には、高齢者の経験を活かした社会活動の必要性など、世代間交流の意義や、高齢者の活動の場づくりの必要性など、「世代間交流のシステムづくりへの期待」が挙げられている。今後の人口減少社会では、高齢者だけでなく多くの課題に対して多世代交流・共生社会の中で支え合うシステムが求められている。学生は、多世代の方々と交流することによって視野を広げることができており、今後も地域の方々の力を借りながら教育に生かしていきたいと考えている。

4) 世代間交流をととした伝承の役割

学生は、レシピ集づくりを通して、〈教えてもらったことを受け継ぐ〉ことや〈共食と調理により伝統を継承できたと実感〉し《高齢者と関わることによる伝統の継承》を体感していた。学生にとってレシピ集は《おばあちゃんとの活動をレシピとして残すこと》の意義があり、【伝統を継承していくことの大切さ】を感じている。その一方で、伝統を受け継ぎ伝えるためのレシピ集づくりを通して、《伝えたいからこそその難しさ》を感じ、わざは〈言葉より一緒に活動した方が伝わる〉と【おばあちゃんの知恵やわざを伝える工夫と難しさ】を感じていた。

今回の世代間交流はサークルメンバーと学生が協働してレシピ集を作成する活動である。メンバーが料理や知恵を伝え、学生がレシピ集を作成するという役割分担の中で、高齢者の知恵やわざにふれる機会となっており、学生と一緒に料理を作り食べるという行為をととして「伝統を継承する」ということを体感できている。大学生の世代間交流のプログラム⁶⁾としては、ライフストーリーを聞いて本にする、アートに表現するという交流プログラムが紹介されている。高齢者から受け継いだものを他者に伝えるという目的をもった世代間交流では、「伝承」に対する学生の意識が高まることが推測され、レシピ集づくりも同様であるといえる。

学生は、レシピ集づくりのために、一緒に料理を行いながら、熟達者であるメンバーの料理やわざにふれる機会を得ていた。メンバーのわざを伝えたいが、聞いても〈口頭でうまく説明できない〉と言われ、学生自身もわざを言葉にする難しさを感じていた。〈言葉より一緒にやった方が伝わる〉というのは、見て、聞いて、触って、匂って、味わうという五感を通した伝わり方であり、料理に対するメンバーの思いや知恵も一緒に伝えられていると考える。学生は《おばあちゃんの知恵やわざを伝える工夫》として、〈直接聞いた言葉の方がわかりやすい〉〈ニュアンスまで正確に聞き取る〉ことの大切さを感じており、言葉で伝承していく難

しさの中から、一緒に活動することの意義について学んでいたと思われる。

学生はレシピ集づくりをとおして、伝統を継承していく事の大切さ、伝統を継承するには一緒に活動すること、高齢者の用いる言葉やニュアンスを伝えていく事を学んでおり、世代間交流における伝承の役割について多くの学びを得ていたと考える。

6. 研究の限界と今後の課題

本研究の協力者は、高齢者に対する肯定感をもち、世代間交流に対して興味関心を持っている学生であることから、学びについて全体化するには偏りがあると考ええる。また、各学科の学生数も1～3名であり学科の特徴とするには限界がある。しかし、レシピ集づくりをとおした世代間交流による学生の学びは、世代間交流をとおして関係性を築くこと、高齢者が活躍できる場の存在への気づき、世代間交流をとおした伝承の役割など先行研究と同様に学習を深める機会となっていた。今後は、多様な学生に対する教育の効果を積み重ねていく必要がある。また、レシピ集づくりを行った高齢者側の意見も踏まえて世代間交流の効果を検討していく予定である。

なお本研究は平成29年度名寄市立大学特別枠支援の助成を受けて実施した研究の一部であり、第37回日本看護科学学会学術集会で発表した。

注1) 社会関係資本。社会・地域における人々の信頼関係や結びつきを表す概念。ソーシャル・キャピタルが蓄積された社会では、相互の信頼や協力が得られるため、他人への警戒が少なく、治安・経済・教育・健康・幸福感などに良い影響があり、社会の効率性が高まるとされる。

引用文献

- 1) 内閣府(2016):平成28年版高齢社会白書(全体版).
http://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2016/html/zenbun/sl1_1_1.html(平成30年3月13日検索)
- 2) 草野篤子(2004):インタージェネレーションの歴史,現代のエスプリ444,インタージェネレーション,33-41.
- 3) 村山陽(2011):「世代間交流」学の樹立に向けて,哲学,三田哲学會,125,75-104.
- 4) 草野篤子,(2011):世代間交流学の樹立に向けてのプレリュード,老年社会科学,33(3),461-471.
- 5) 福田峰子,加藤智香子,梅田奈歩他(2014):大学生・高齢者観の交流・生活支援に対する意識調査,生命健康科学研究所紀要,11,73-78.
- 6) 糸井和佳,亀井智子,田高悦子他(2012):地域における子どもの世代間交流プログラムに関する効果的な介入と効果—文献レビュー—,日本地域看護学会誌,15(1),33-44.
- 7) 入江和夫,山本圭郎(2006):大学生の高齢者観,山口大学研究論叢.芸術・体育・教育・心理,56,35-45.
- 8) 備酒伸彦,山本大誠,川越雅弘(2007):中高年者と大学生の抱く高齢者像,神戸学院総合リハビリテーション研究,2(1),83-90.
- 9) 今井雪香,片岡万里,柳田泰義(1998):老人イメージに関する調査(2),看護大学生と一般大学生との比較,神戸大学発達科学部研究紀要,6(1),225-234.
- 10) 澤田節子(2006):高齢社会と高齢者像,東邦学誌,35(2),71-83.
- 11) 兎澤恵子,古市清美,高木タカ子(2006):看護大学生の連続学習による高齢者イメージ変化,群馬パース大学紀要,3,381-387.
- 12) 古村美津代,中島洋子(2003):健康な高齢者とのふれ合いを通しての実習の学び—実習記録の分析から—,老年看護学,8(1),78-85.

- 13) 張平平, 大塚真理子, 辻玲子他(2013): 看護学生と地域高齢者との世代間交流がもたらした成果 ―文献研究をととして―, 埼玉県立大学紀要, 43-51.
- 14) 松田武美, 福田峰子, 梅田奈歩他(2015): 看護学生・高齢者世代間交流による相互学習の取り組みの効果 ―ライフストーリーインタビューによる傾聴体験を通して, 生命健康科学研究所紀要, 12, 54-61.
- 15) Polit, D. F., & Beck, C. T. (2004): Nursing Research, Principles and methods, Seventh edition. Lippincott Company, Philadelphia. /近藤潤子監訳(2010): 看護研究―原理と方法(第2版), 353-355, 医学書院, 東京.
- 16) 厚生労働省(2016): 平成28年国民生活基礎調査(概況).
<http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/k-tyosa/k-tyosa16/index.html> (平成30年3月13日検索)
- 17) 鹿毛雅治(2013): 学習意欲の理論, 133-141, 金子書房, 東京.
- 18) 村山陽(2013): 現代社会における高齢者と子どもの関係の再構築 ―高齢者世代と子ども世代の世代間交流を契機とした地域コミュニティの再生―, 慶應義塾大学大学院社会学研究科博士論文.
- 19) 藤原佳典(2013): 第3章 世代間活動の効果. 倉岡正高(編), 地域を元気にする世代間交流, 36-57, 公益財団法人 社会教育協会.